

歳を重ねるにつれて、人の死に触れることが多くなるものでしょう。死後の世界は様々に論じられています。問われるのは、今生きている私たちがどのような生き方をするか、ということではないでしょうか。

二〇一八年に日本でも公開された映画「リメンバー・ミー」は死者の国が舞台です。メキシコの伝統的な祭礼の「死者の日」がモチーフになっています。作中に「人は二度死ぬ」というセリフがあります。監督のリー・アングリッチ監督はリサーチでメキシコ各地に足を運んだ際、「人は三度死ぬ」という地元の人々の死生観が印象に残ったそうです。一度目は、息を引き取った時。つまり医学的な死。二度目は埋葬または火葬されて肉体的な存在が無くなった時。三度目は、亡くなった人を思い出す人がいなくなった時です。

映画の中でも、既に亡くなり死者の国で過ごしている人が、消えてしまうシーンがあります。それは思い出してくれる人がいなくなってしまうことを示しています。

一方で、死者の日には、家族の祭壇に写真が置かれている亡くなった人は、現世に戻り、直接会話などはできないものの、その夕べを家族と共に楽しく過ごすことができます。

純粹倫理では働きがあるものを「生きている」と捉えます。壊れたコップは捨てられ、それは死を意味します。逆によく働かせることを活（生）かすとも言います。亡き人を思い出すことによって、生きています。



故人に心を向ける

人は何かしらの影響を受けるでしょう。それは、亡き人が生きている人に対して働きを有していると捉えることができます。肉体は無くなったとしても、亡き人は私たちが思い出し、影響を受け続ける限り生き続けているという見方もできるでしょう。

実際に、お墓参りを重ね、亡き人と心で言葉を交わし、それによって人生や経営に光を見出した会員の体験は数多くあります。その実感が深い方の中には、亡き人がいつもそばにいると感じると言う人も少なくありません。少なくとも、その人にとって、亡き人は生きていると言えるのでしよう。

見方を変えようと、亡き人が生き続けるかどうかは残された人に委ねられているのではないのでしょうか。

残された周囲の人間が亡き人の生き方や言動から何かしらをくみ取り、自らの人生に生かすことによって、亡き人もまた生き続けるのです。

毎日でなくとも、仏壇などに手を合わせたり、お墓参りに行ったりすることで故人を偲ぶ時間を設けてはいかがでしょうか。故人と心の交流から、自分自身の心の迷いが解けたり、勇気づけられたりすることがあります。今を生きる者が、故人からの力を受けて人生を力強く歩む姿は、故人から見ても嬉しいものに違いありません。

故人が安心して、笑顔で見守っていられるような生き方をしたいものです。それがよりよく生きるための一つの指針となるのではないのでしょうか。